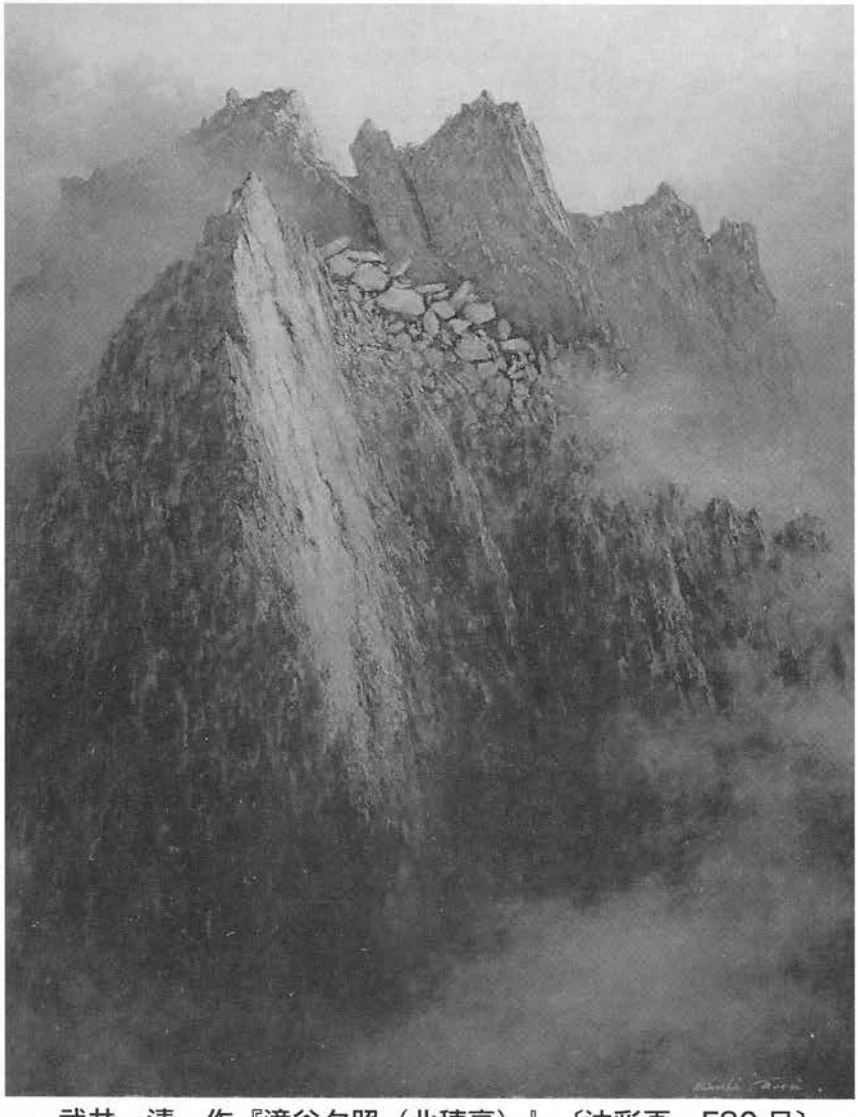
山と博物館

第５６巻　第８号　２０１１年８月２５日　　市立大町山岳博物館

特集「日本山岳画協会　創立七十五周年」



武井　清　作『滝谷夕照（北穂高）』〔油彩画・F80号〕
（この作品は、平成23年２月　大町市に寄贈頂きました。）

ご挨拶

武井　清

私共日本山岳画協会が発足して七十五年が経過致しました。その間、此処大町山岳博物館で、定期的に特別展を開催させて頂くようになってから二十七年、弊会の歴史の三分の一にこの博物館が係わりを持って居りまして、お蔭様で毎回多数の来館者とともに、大町市には多大の御支援を頂き、弊会の発展を支えて下さった事に深く感謝申し上げるものであります。

振り返って見ますと、日本山岳会を母体として創立された当時の会員は十二名と記録に有り、その後戦中戦後を通じ幾多の入退者がありましたが、最も多数を擁した時でも四十名を超えることなく、小規模ではあっても山岳を真に尊崇する画家の集団として今日に至りました。現在の会員数は二十一名で山岳芸術の発展振興に及ばずながらも寄与すべく、内外の山々をテーマとした作品の制作に日夜励んで居りますので、今後とも関係各位のご指導ご鞭撻を賜ります様、偏にお願い申し上げる次第であります。

（日本山岳画協会　代表幹事）

座談会「日本山岳画協会　創立75周年を記念して」

今年は日本山岳画協会創立75周年の記念の年に当ります。山岳画協会の皆様には、およそ5年に1度定期的に特別展を開催し、大町山岳博物館としても折々にご協力を賜っております。創立75周年という記念の年に、座談会を開催し山岳画協会のこれまでの歴史と今後の活動についてお話をお伺い致しました。

座談会日時：　平成23年6月27日（月）
　　午後3時～
座談会会場：　大町市八坂　明日香荘
参加者　　：　日本山岳画協会会員6名
　　司会・編集　：　清水隆寿

―このたびは日本山岳画協会発足75周年おめでとうございます。また今回併せて出版されました「日本山岳画協会　創立75周年記念画集」の発刊をお喜び致します。一口に75周年と申しましても、多くの先人のたゆまぬご苦労があったことと思います。また発足当初には戦争という苦難もありました。75周年を迎え、現在の感慨をお聞かせください。

（武井代表幹事）

大町市の山岳博物館さんには、前々よりお世話になっており、ありがとうございます。又この度は私どもの75周年にあたって、このような形で特集をして頂くということで、重ねて御礼を申し上げます。75周年の歴史を振り返るということですけれども、一番の古手の熊谷樋さんは51年、江村さんは36年という、二人の先輩が今日は都合によりましてどうしても来られないということで、残るは若林さんが30年、若林さん以外はみな新参者です。さて山岳画協会の発足は、昭和11年で、昭和12年には支那事変、それから太平洋戦争が昭和16年。終戦とそれに伴なう混乱期。こういう歴史を乗越えて今日に至ったということは、これは驚異的で、至難なことではないかと思います。先輩達が大変なご苦労をして、ここまで来られたということに心から敬意を表したいと思います。

―今回75周年を記念して画集を出版された思い、願いというのはどのようなものなのでしょう。

（若林）

今ここに今回出版されました画集のほかに、これまでに出版されました記念誌を持参致しましたけれども、これまでの記念誌というのは画集ではなくて、文章を纏めたものが3回出版されています。その中に亡くなられた先輩の作品を載せたものもありますが、何れも作品集ではありません。このたび75周年の節目の年に当たりどのようにしようかと相談をし、今度はたとえささやかなものでも絵の入ったものを作りたいという皆さんの総意によりまして、これを纏めさせて頂いたわけです。前員の方には創立会員の作品を入れることにし、以降はそれぞれの会員の作品を、必ず今年展覧会に出すものを一点掲載するという基本的な考え方で作らせて頂きました。

参加者：（左から）田中泰道・千葉潔・須藤卓男
武井清・中村勝久・若林晴男

―日本山岳画協会の創立が、昭和11年と伺っております。会員の中には日本を代表する錚々たる画家の方々が属しておられるわけですが、合計するとこれまで何名ほどの会員がこの会に属しご活躍をされたのですか。

（若林）

会員の数は、この間新しく入った方を入れて、通計103名になります。その他に一時、客員制度というのがありまして、その客員に名を連ねている方、それから当初顧問で名を連ねている方を合わせますと、106名か107名になります。正確には記録が残っていないのです。

若林晴男「山湖秋映」（油彩・F50）

―現在の会員の数は何名になりますか。

（若林）

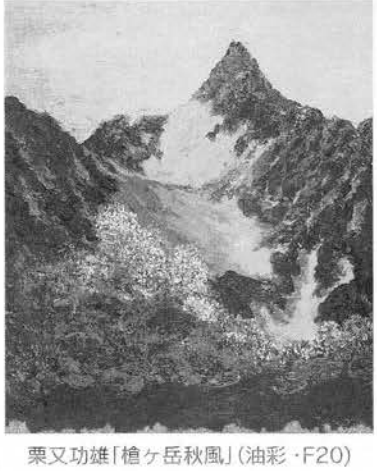
現在は21名になります。

―創立からの大まかな山岳画協会の歴史の流れをお聞かせください。

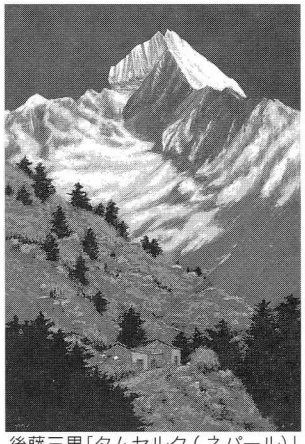
（若林）

昭和11年発足の時の会員が12名。それに顧問の方が日本山岳会から2名。それから10年間、つまり終戦までの間に加入された方が7名で、19名で昭和20年までつづいていました。その後は戦後の混乱期で、世の中は絵だとか登山だとかという状況ではなかったと思うのですが、そのため昭和23年頃までは、まったくなにもしていなかった、いや出来なかったのだと思われます。

なぜそれが言えるかというと、その後の展覧会の回数と年号を付き合わせると5年間の空白ができてしまうのです。昭和24年に再発足を致しまして、その時のメンバーは15名です。これは今回の画集の略史に名前を挙げておきましたが、戦前のメンバーから再発足のメンバーに入って居られる方は、創立会員5名と他に3名計8名が残られました。その15名を軸にしまして活動を続け、その後、特に大勢加入者があったのが、昭和31年で21名加入しております。此の時は特に日展系列の先生方が相当数加入されています。その後は多い時でも8人とか5人です。これは会の決まりで、会



栗又功雄「槍ヶ岳秋風」（油彩・F20）


後藤三男「タムセルク（ネパール）」（油彩・P50）

員とする場合には必ず推薦人を2名立て、その時の会員が審査で決めてきました。本人が自薦で入りたいと言われても、推薦人が無ければ入れず、また入れたいということで推薦されてきても、皆さんの審査に通らないと入会できないということをやってまいりました。ですので会員のメンバーというのは多くなっても40名どまりであったと思います。

―中村清太郎さんが会報のなかで、山岳画協会の発足の趣意書を書き残されています。その後も会として大切にされて、会員の皆さんに伝統として受け継がれているといった思いや約束ごとといったことは何かあるのでしょうか。

（武井）

とりあげて約束事というものはないですね。中村清太郎さんが残した趣意書を、今回の画集にも掲載させていただきました。そこでいう山岳画とは何か。山岳画とはただ山の頂上とかではなくて、遠望も、山麓も、山の花や池や沼、湖などそういうものすべてを合わせた形で、山に包括したようなものを山岳画と称するのだと。ですので、なにも山に登って山を描くということだけが山岳画協会のねらいではないよと、中村さんの趣意書は言っているわけです。ですが時とともに山岳画というものが、山に登って山の絵を描かなければ山岳画ではないという、そんな狭義の意味にとらえられた時期もありました。山に登って日の出だとか、夕陽だとか、その時の感動を一般の人にどう伝えるのが山岳画なんだよと。それは約束事といったものではなく、時の流れのなかで変ってきたものと思います。

―日本を代表する錚々たる画家の方々が先輩としておいでになったわけですが、ご自身が日本山岳画協会に入会するにあたって、尊敬したり、目標としたりした方はどのような方がおいでになったでしょうか。あるいは実際にその先生方と接する中で、自分が影響を受けたり、その先生や友人の思い出を語っていただければと思います。

（田中）

特にこの先生を尊敬すると言うのではないのですが、私はスキーとか登山とかスケッチなどで安曇野を通ることが多く、安曇野に山岳美術館というのがありまして、そこによく立ち寄りました。そこで創立会員のお一人の足立源一郎さんの絵に接しまして、特に涸沢でしたか、岩肌を描いた臨場感の溢れる絵に、非常に関心を持ちまして、そんな絵が描けたら良いなと思いました。それがこの会に入れていただく原因にもなったのではないかと思います。

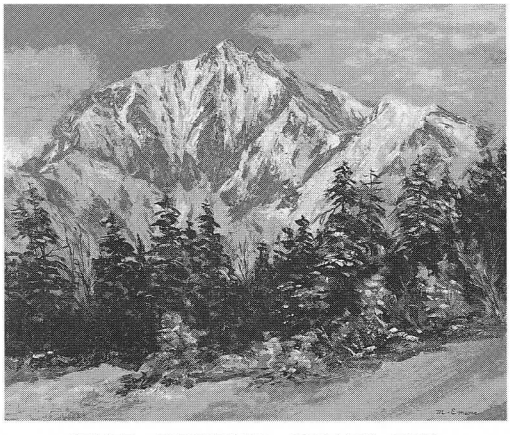
田中泰道「バザールへの道」（油彩・F50）

山を描くようになって、この会に入れて頂くまでは特に山岳画の先生に接する機会はなかったのですけれども、自分が小学校の頃に近所に一水会の三浦俊輔先生がいらして三年程習ったことがあります。その中で三浦先生のお知り合いで、この会にも入っていらした阿蘇をよく描かれた田崎広助先生をお招きしてスケッチ会をしたことがありました。その批評会で「灰色先生」と呼ばれるくらい、しっとりとした灰色で描かれる田崎先生から「この絵はしっとりとした良さがある」と褒めていただいたんですね。他にもいくつかそんなきっかけがあったと思いますが、今も私が絵を続けている一因になっているんですね。「〇〇もおだてりゃ木に登る」といったところでしょうか。

（笑）それは冗談としても、今でもその時に言われた潤いのあるしっとりとした絵というものは大切にしていきたいと思っています。

（千葉）

私がこちらにお世話になるきっかけは、今代表幹事をされている武井さんの方から1，2年に亘ってお誘いを受けたということで、本当にありがとうございました。会に入らせて頂いてからも


江村真一「待春鹿島槍ヶ岳」（油彩・F20）

皆さんにはよくして頂いております。それまでは画壇という生活をあまりしようとは思っていなかったのですが、今は山を対象とした絵を描く集団にいることを喜んでおります。また会に入らせて頂いて、今日もご一緒させて頂いております若林さんからも最初の頃より声を掛けて頂きました。また残念ながら体調を崩され退会されましたが、上田太郎さんにもいろいろとお話しする機会があって、見ている方向も一緒のところがあって良かったなと今は思っております。先ほども山に登って描くのが山岳画か、あるいは風俗・風物を含めて山を描くのが山岳画かという議論のあるところですが、上田太郎さんは自分が登山できず絵も描けなければ、これで潮時と言われ、そうした生き方にも共鳴するところがあります。上田さんは、尾根筋をテーマにしてきたのだとおっしゃっていました。千葉さんは清らかな水を描いたらどうかと言ってくださったこともありました。いずれにしても皆さんからいろいろな影響を受けて自分の考えとか自分の仕事をしていく方向みたいなものを考える良い機会を得たことはありがたかったなあと思っております。

自分が山を描くきっかけは何かということも含めて話しますと、70周年記念紙にも書かせて頂いたのですが、大阪で高校の美術教師をしていたことがあるのですが、その当時の仕事はシュールなもの、コンテンポラリーな感じだとかというものを追いかけておりました。同僚と山に行った折に、その同僚が言った言葉に胸をハッとさせる部分がありました。それは山がこんなに好きで、いつも山に登っているのに、どうして山を描かないのという一言があったんですね。それもそうだなあと後になって浮かんでくることもありました。自分が楽しみで登って山を歩いている状況の中で、絵を志している者としてそれを対象とするのは、なにも不思議ではないとあらためて感じました。結構、自分が何かにしっかりと目を向けるきっかけ

千葉潔「槍ヶ岳遠望（前穂高北尾根Ⅵ峰より）」（油彩・F50）

になるのは、自分の中から発するものもあるかもしれないけれども、自分を知っている、あるいは客観的に見ている、そういう人が一事言ってくれることで、背中を押してもらうこともあるのだと思います。

（須藤）

正直に申しますと、私はこの錚々たる先生方がいらっしゃる日本山岳画協会というものをまったく知らなかったんです。私自身、中学、高校時代から美術部に入って絵を描いておりましたが、大学に入り、就職してからは土曜・日曜もなく、連日の残業で絵を描くような状況ではありませんでした。昭和52年九州支店に転勤になりました。偶然私の部下に絵を描く者がいて、「実は九州支店には美術部があり、先生がこられています。一緒にやりませんか」と、引きずり込まれ、それが再度絵を始めたきっかけとなりました。美術部では、年一回スケッチ会があり、阿蘇にスケッチにまいりました。観光でおとずれた時の阿蘇は、雄大な大自然として、私に感動を与えてくれたのですが、絵を描くつもりで訪れてみると、題材が多過ぎて焦点がしぼられず、私はただあれもこれも見たままを描くだけでした。できた作品は、感動もなければ面白みもないものでした。先生に見ていただくと、「ただ上手に描くだけでは駄目。あなたのねらいはどこにあるのか。何を描こうとしているのか。表現したものが画面に出てきて始めてその人の感性の絵になるのだと。

その後再び東京勤務になり、信州にゆく機会を得ました。5月の田植の頃ですが、眼前にひろがる山並風景に釘づけになってしまいました。このような時に日本山岳画協会展の案内をいただき、「山の画家集団」に出会いました。それから諸先生方と知りあいになり、毎回見に行ったわけです。とにかく諸先生方の素晴しい絵を見て、こういう会に入れればいいなと思っていたのです。

ある時、江村、武井両先生にお会いし、色々な話しの中で私も入会したいと、なかなか言い出せなかったのですが、こうした経緯があって何とか入会することができました。入会しましたら錚々たる創立会員の先生方は、絵を描くだけでなく、大変な登山家であられるし、又、かつてこの会には大変な先生方ばかりが入会されていた事を知り、びっくり致しました。今年で75周年になりますが、このような会に入会できたことを光栄に思っています。

須藤卓男「五竜岳（八方尾根より）」（油彩・F50）

（中村）

僕は入社してすぐ絵画同好会に入ってやっていました。その後昼間働いて、夜は美術研究所に約10年間通いました。ですから裸婦のモデル、コスチュームのモデルあるいは静物を描くということで、山から絵に入ったということではありませんでした。とくに風景が好きでしたが、景色で一番いいのは上高地だろうと、友達から言われ入り浸って描いているうちに、だんだん山が好きになっていって、あちこちに描きに行くようになりました。五月のスケッチ旅行に出かけた時のこと、大阪から夜行電車に乗って朝の5時ごろ白馬駅に着いた時、突然目の前に真っ白な白馬連峰が見えて、息をのむような迫力で、日本にこんな景色があったのかと圧倒されました。山に本当に取り付かれたのはその頃でした。上高地には、日本山岳会の小屋があって、安く泊まれ日本山岳画協会の藤江先生ともお話する機会があって、だんだんと山の話もお聞きし、ヒマラヤはもっと凄いぞという話を聞いてヒマラヤにも行きました。

52歳の時、早期退職をして念願の絵描きの道に入りました。同じやるんだったら毎日信州の山を描いて暮らしたいと、北安曇郡松川村に移住しました。山岳画家として考えた場合に、山の上から描く、下から描くといろいろな話があったんですけれども、僕は例えば石川啄木なんかの「ふるさとの　山に向かいていうことはなし　ふるさとの山はありがたきかな」というような思いとか、ある時スケッチをしている僕の横から「山はいいよね　いろんな時に　何でも受け入れてくれるし　誰でも　悲しい時　嬉しい時も山は受け止めてくれるもの」という人の話などがあって、そんな想いを絵の中に込められたらいいなと考えています。

中村勝久「鹿島槍」（油彩・S50）

山岳画協会というところで山の絵をテーマにして描ける仲間になれてよかったなーと思っています。

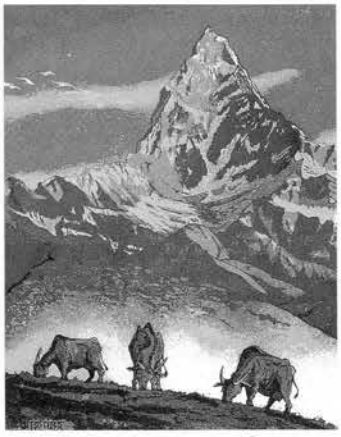
（武井）

たまたま私が小田急の新宿で30年近く個展をやっているんですが、その時に加藤水城さんにお逢いしました。丸っこくて、ニコニコされている方でした。山の絵もあったし花の絵があったりして、初めてでしたがとてもいい方で、名刺には日本山岳画協会と書いてありました。その後、足立真一郎さんは別の会で写生会が一緒になり、30年近く前ですが一緒に水上の方に電車でいったことがありました。そうすると待合室などで足立さんと話をいろいろするわけですね。息子さんはデザインか何かをされているのですが、息子だけは絵描きにはさせたくないと、そうした話をしみじみとするわけです。何でですかと聞くと、苦労が絶えないと。その頃は足立真一郎さんといえば、たいへんなものでしたが。足立さんも日本山岳画協会で非常に人柄もよく、山岳画協会というのはいいところだなあ、ぜひ入りたいと思っておりました。その時は私は別の会に入っていました。入った時の事情はいろいろあるのですが、私が東急で展覧会をやった時に牧先生が入らんかと来たんです。大分昔の話ですが、そのときはお断りしたん

です。そしたら牧さんが気分を悪くして帰ってしまったんです。（笑） いろいろと行き違いがありまして、わざわざ先輩が来て頂いて申しわけないと、実は大分後になってから、こういう訳だとあのときは失礼したということで、入れて頂いたわけです。

山との出会いは、学生の頃、野球の選手だったので、シーズンオフのトレーニングで山へ行ったのがきっかけです。冬山にスキーを担いで、その頃は白馬にゴンドラもリフトもない。雪のなか細野の集落から黒菱の小屋へ、それから唐松の小屋まで行きました。その時に、山の美しさ、素晴しさに感激したんですね。はじめてみる白馬三山がきらきらと光り輝いている。ドキンときましたね。もう一つは北穂高の滝谷。夕陽が滝谷の岩壁にあたり、下からは灰色のガスが湧き上ってくる。つきあげるような感動で言葉もなく、ただ茫然としていたことを憶えています。この感動を絵に出来ないか。この感動を人々にどう伝えられるか。ここからが私の本当の意味での山岳画を描く原点になりました。もう50年以上も前のことです。

私は絵を画く場合、対象となる山を90％以上登ります。描こうとする山に登るということは、その山に親しみも沸くし、山肌も分ります。ただそこから見えるものを描けばいいのではなく、そこに何か感動を覚えたものだけが、描きたいという意欲が沸く。それを探して又新しい所へ行く、こんなことを本気で一生懸命やっていた時代が結構長くありましたね。


杉山脩「静かな朝　マチャプチャレ・ネパール」（木版）

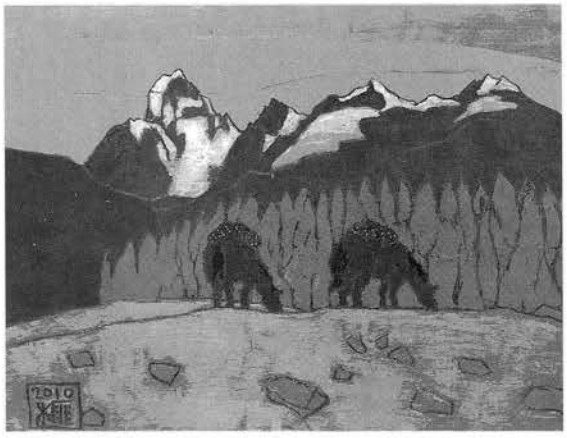
青木惇子「ベッターホルン」（油彩・F50）

先ほどから話しが出ているように、山岳画・山麓画といった問題ではなく、作者の心が山に向かっておれば、それでいいじゃないかというふうに今は変わってきました。僕が歳をとって山に登れなくなったから言うわけじゃありませんが（笑）。

（若林）

この会との関わりは藤江幾太郎さんでした。この方は私の学校の先輩で、就職した会社に居られて、新米の私に同窓と言うこともあって、目をかけて下さいました。当初は絵のこと何も申し上げず、一人我流でちょっと描いていた程度ですが、会社の同好会の展覧会があって、家の近所の風景画を持っていったんです。そしたら「お前これだけ描ければいいじゃないか」ということで。一番初めのきっかけは、藤江さんが「あの絵な、こんど勤労者美術展へ出すからいいだろう」という話があって、全部お任せ致しますということになりました。第11回の勤労者美術展で昭和33年12月のことでした。古い東京都美術館で、東京都と労働省の併催だったと記憶しています。それで出して頂いたのですが、どうせそんなの通るわけがないやと思っていたのです。ところが、しばらくすると「お前の入賞しちゃったぞ」というわけですよ。そして奨励賞の通知が来て、これで絵と離れられなくなっちゃったんですよね。またしばらく経って、藤江さんの口利きで、お前俺のいる白日会へ出せるような絵を描けよというわけで、それではと家の近くの製糖会社の建物などを描いて入選させてもらいました。その時から少しずつ風景画を主力に描くようになっていったのです。

山の絵の作品を見て良いなーと思ったのは、この会のメンバーだった中村善策さんの絵です。八ヶ岳を描いた作品をその頃のある展覧会で見てからです。また明科の長峰山のところから下の犀川とその向こうまでの風景を大きく描いた絵があり、それは日展だったか一水会だったかどちらかで見ました。此の時も作者の名前を見ないうちに、絵からドキンときて、感動したことが忘れられませんね。そして何時か自分もこういう絵が描けるようにならなくちゃと思ったものでした。ですから白日会に初入選し、それから毎年出品を続け、その後会員となり彼是40年出させて貰いました。その途中で藤江さんがある朝電話を掛けてきて、「今度な山岳画協会のメンバーにするからな」というわけですよ。こちらは否も応もないわけで、この会のメンバーにさせて頂いて、まだまだ駆け出しで碌なものも描いて居ないにも拘わらずでした。


熊谷榧「草はむ馬とスークーニャン山」（油彩・F50）

また、今お話しした事より以前に、学校友達の一人が銀座の登山用品店に勤めていたので、偶々そこに遊びに行った時、今度一緒に立山・剱へ行かないかという誘いを受けたことがあったんです。僕はそんな高い山なんか一遍も登ったことないよと言ったんですが、全部用具を揃えてサポートしてくれるということで、その彼の友人と都合4名が夜行列車で富山に行き、ケーブルで美女平に上がりそこから弥陀ヶ原をずっと歩いて、別山乗越までおよそ1日、その時の弥陀ヶ原にこれまたドキンとさせられてしまって、丁度紅葉真っ盛りで、その向こうに立山が見えその雄大さに感激しました。その日最後の登りの雷鳥沢を詰めて、剣御前に上がったら、剱岳がガーッと眼前にせまって、これは凄いなーと心底感激しました。

此の時は剱・立山から針ノ木岳まで縦走する計画でしたが、台風接近との情報が入り、それでも剱岳だけは頭を踏んで来ようということで、別山・前剱を経て登頂しました。その前日の夕方剱御前小屋から望んだ大日岳や薬師岳などの周辺の山々の向こうに沈んでいく夕陽の色は、今でも思い出しますね。こうした処の絵も俺に描けるかなーと思いながら見惚れていました。登頂の翌日振り返るとまだ剱の山頂が見えました。山を真正面から描き始めたのは、この時が初めてだったと思います。これは昭和34年秋のことです。

その後、いろいろな所の山の絵を曲がりなりにも何とか描いていましたが、何時まで経ってももさっぱり上達しなくて、そうしたら藤江さんがこの本を読めと言って昭和30年代当時のフランスの著名な画家・美術評論家並びに画商でレジョン・ドヌール勲章受章者のアルマン・ドゥルーアン著「絵画教室」をくれました。随分古い本ですが、それを見ると絵に対する心掛けが書かれてい

増田欣子「タムセルクの朝」（油彩・F80）

るんです。その中で、一番私が感銘を受けたのは、絵に対してどういう心持で描かなければいけないという最大のものは、真面目という意味で、「真摯」ということ。之がない絵は駄目だと書いてあるんですね。これはいまだに私の仕事の中で忘れずに死ぬまで持ち続けていこうと思って描いています。

先刻のメンバーの話の補足になりますが、錚々たる方々については、文化勲章受賞者は田崎広助さんが1975年に受章、そして日本藝術院会員を務めてらしたのは1967年～84年。これは間違いなく、山の絵であれだけのお仕事をなさったことへの評価だと思います。もう一人は伊藤清永さんですが、御存知の様に主に人物画を描いて居られ、山岳画を余り見ていませんが、ひとつだけ上高地を描かれた絵を拝見した事があります。文化勲章受章は1996年、日本藝術院会員は、1984年～2001年まで。その他、日本藝術院会員の方の名前を挙げていきますと、石井鶴三さん（1950～73年）、大久保作次郎さん（1963～73年）、井手宣通さん（1969～93）、水彩の小堀進さんは（1974～75年）と年をまたいでいますが1年経たないうちに亡くなられて数ヶ月しかおやりになっていません。高田誠さん（1978～92年）、田村一男さん（1980～97年）、楢原健三さん（1988～99年）、それから本名佐竹徳次郎さんだけれども、絵の上では次郎を取ってしまって佐竹徳さん（1991～98年）、藤本東一良さん（1993～98年）の11名です。これ以外の方で、江藤純平さんと中村善策さんの作品が日本藝術院に収蔵されています。私共はそういう方々の後塵を拝しているわけで、もっと一生懸命勉強しないといけないと思うわけです。

―山に対する思い、そしてその山の絵を描きたいと思う理由や制作の意図はどのようなものをお持ちでしょうか。

（田中）

自分が山歩きを始めたのは、植物採集からですので中学・高校の時からでした。ですから山は結構あちこち歩いています。私は教員だったものですから、夏休みがあって、その夏休みに東北の山から南アルプス北部まで歩きました。

絵の方は以前水彩で風景を描いていました。油絵は描き始めてから今年で30年になるんですが、勤めていた間は麓から絵を描くということで「山麓画」でした。それまで暇が無かったんですが、ヒマラヤを見たくて3月31日退職で直ぐ4月2日から絵の道具を持ってネパールへ出発しました。ヒマラヤ、カラコルム、ロシアの山などあちこち歩き回って山をスケッチしてきました。

その山なんですけれども、とにかくいろんな姿を見せている。季節とか天候、時間とかいろんな姿を見せてくれる。これはとても面白いですね。その姿がまた自分にいろんな感情を起こさせる。その大きさから自分の気持をゆったりしたものにし、日常の何か細かい事にこだわっている自分をつまらないなぁといった感じにさせてくれたり、あるいは山の上昇感と言いましょうか、あるいは神々しさなども感じさせ、気持を高ぶらせてくれることもあります。自分の気持をいろいろに変化させてくれる、というのが山にはあるのではないかと思うんですね。そんないろんな感動をさせてくれる山、その山の姿をいろいろに表現できたらと思っています。また日本の山もいいなと思います。緑が多くてね。

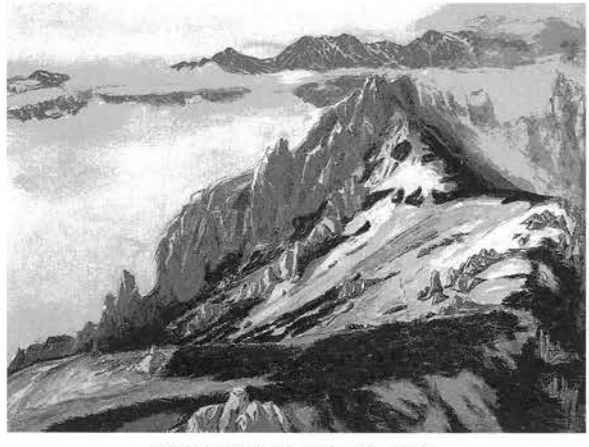
（千葉）

今、田中さんがおっしゃったような事柄は、自然の移ろいを経験された方は、同じようなところをお持ちだろうと思います。実にクリアーな空気の中で、光とか風とか、そんなものが表現できればと常々思っていることでもあるんです。実はこの6月に大阪の堺で個展をさせていただいたのですが、ギャラリーのオーナーが書いてくれた文章があるんです。現在たくさんの方々が登山を楽しんでおられます。登山を通して山の匂いとか雪解けの冷たさとか、光とか感じ取っていらっしゃるんだろうなと思うんです。それをこのオーナーは「千葉さんの絵は山の匂いや、雪解けの水の冷たさの感覚を甦らせてくれます。ああ、そうだったという共感はなぜだか人を元気にします。もう二度と戻らない時間に対する哀切の思いを超えて、前を向いて歩いて行く元気を出させるのです。芸術のもつ力のひとつです。」と書いてくださっているんです。これは文章でもかまわないでしょうし、音楽でもいいでしょう。二次元の空間を使って表現することに魅力を感じている人間としては、少しでも自分の作品を通して、元気が出る、あぁ良かったなあという、同じような空気を共感をもって吸える、というようなことも含めて遣り甲斐のある仕事だなあと思います。

小高民江「穂高連峰」（水彩・P30）

（須藤）

私の場合は、大学に入った年に仲間と一杯呑みながら話をしているうちに、山に行こうではないかという話になりまして、ではどこがいいかということで、北アルプスの涸沢でも行ってみるかなんていう話から、全くの素人だったんですけれども、涸沢に入りまして北穂に登りました。北には槍ヶ岳、西には笠ヶ岳や南には富士山と360度ぐるっと見えて、その時の感動がずっと残っていました。その後九州支店に転勤になり、山とはほとんど関係がなくなりました。その後再度東京に転勤になり、安曇野にくる機会があり、5月の田植えの頃、雪をいただく山並、水田に写る新緑そ


細野清嗣「北燕岳」（水彩・P20）

して清流が流れている風景に感動致しました。毎年その頃からスケッチをしに来ていたわけです。そうしているうちに、日本山岳画協会に入会させていただきました。そんなわけで槍ヶ岳の方にも登らせて頂いて、その後毎年山の絵を描かせて頂いているわけです。

（中村）

ヒマラヤへ行ったり、日本の山で絵を描いていますけれども、ヒマラヤは猛々しいというか、荒々しいというか豪快で、何か宇宙と繋がっているなと感じますけれども、日本の山も凄いと思ったけれども、日本の山はやはりそれと比較してみると優しいですね。やはり僕らは日本に住んで、日本の山を見ているから日本の山の方に愛着を感じます。ですからそこら辺の感性なども知りたい。ネパールの人々は、一つひとつの山をみな自分達の山として見て、エベレストは世界のNo.1ということで自慢に思っているし、あの前の山は自分達の山だということで感性の違いがあると思う。僕はどちらの山が好きかと言われるとちょっと困るのですけれども、日本の山では餓鬼岳を見ても鹿島槍ヶ岳を見てもやはりなにか親しみを感じるとか、そうした日本人の感覚を持っているんだなという感じはします。自分の気持に素直に対象を見ていくと、ヒマラヤのあのごつごつとした感じにも憧れはありますね。ですからもう一度ヒマラヤも見てきたいなーと思いますね。

藤田錦一「五竜と鹿島槍」（油彩・F50）

髙橋てる子「乗鞍岳・焼岳（西穂高岳より）」（油彩・F80）

（武井）

いま千葉さんの展覧会のパンフレットの中にこういうことが書いてあるんです。「生涯を通して描きつづけたいと思う対象に出逢えた作家は幸せだ」と。これは私も同じことを言われました。中国人で台北の方なんですけれど、向こうの美術学校を出て、東京芸大の大学院を出て国画会の審査員をやっていた郭東栄（かく・とうえい）さんという人が、家に遊びに来たり、一緒に山に描きにいったりしたのですが。その人いわく、武井さんは幸せだよと。何でと言ったら、多くの作家は目標が定まらないという事です。美術の勉強をしているから、人物は描くは、静物は描くは、風景は描くはと、何でも描いてしまうというんです。そうすると俺の一生のテーマは何かというものが、何もないというんです。ようやくテーマが見つかった時は、もう歳で描けない、そこへいくと武井さんは山というテーマがある。早くから自分のテーマをもってそれ以外は、一切かかないという徹底したやり方をしているのは、非常に作家として幸せだなあとしみじみと言った事がありますね。

（若林）

何十年もやっていれば、思い入れがあってあたりまえ。いろいろ今の話を聞いていると思い出しますね。でもやっぱり山が好き、だから山を描くんですよね。

（武井）

好きなんですよ、山が。

ーどの先生も、ひととおりやってみて、山に行きついた。

（若林）

そうでしょうね。

ーここちいい。それは理屈じゃないんですね。

（武井）

理屈じゃないですね。山に登るというのは達成感が凄いですよ。生きているというか、それにドキンというものがあれば、これはなんともこたえられませんよ。ただ残念ながら体力がだんだん無くなってきましたわ。

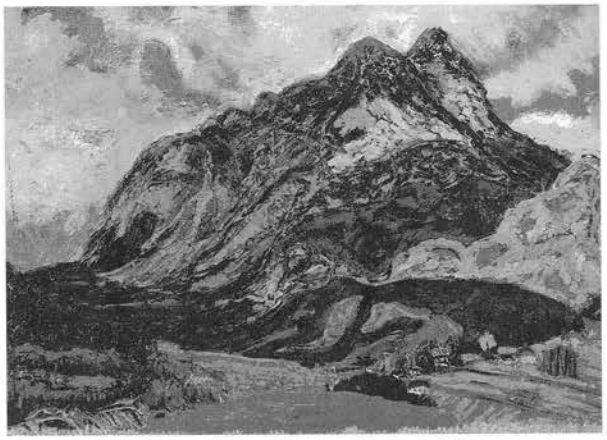
（若林）

私はセザンヌがサントヴィクトアールを描いたのと同じように、同じ山でも家の裏の鹿島槍や爺ヶ岳が朝起きた時から夕方まで、見えるんですからそれらの山をじっくり描きたい。モルゲンロートが見られる日もあれば、夜の月光の下雪に映えてこうこうと見える時もあるし、同じ所でこれだけ違うし、四季折々雪の量も変わりますし、それに対する光の当り方も、夏と冬ではこれだけ違うのだなというのも目の当たりにしました。月の出るところも同じ鹿島槍の北に寄っているときもあれば南の方に寄っている時などの違いがありますから。それらを忠実に描きたい。そういう山の麓には、雪解けの水だとか暖かい日射しだとか、人間に対する恩恵がありますよね。それを受けている人間の営みなどが描けたらいいなと思うんです。ですから私はあんまり頂の厳しい所を描いていませんよ。それはこっちが其処まで行くとくたびれてしまうのもあるんですけれど。（笑）ゆっくりと腰を落ち着けて一つの山と対峙する為には、不精な様だけれども自分の所から年がら年中見る事ができて、頭の中にしっかりはいっている、そういうかたちで把握したものを表現することを作画の根底に置きたいと思います。そして作品を見て下さった方が、これは俺の故郷なんだなとか、旅にお出でになった方でも、日本にはこういういい所があるんだなー、自然の中で暮らしていくということはこういうことなんだなー、という雰囲気を描きたいなと思っています。

ー今後の日本山岳画協会の方向性といいますか、会として取り組んで行きたいということはありますでしょうか。

（武井）

日本山岳画協会が長い時間をかけて築き上げたものを、これからさらに強固なもの、より拡充していくこと、これが今我々に求められていると、これは先程も申し上げましたが、しかし時代の変化とともに、なかなか人が集まらない。こういう時代の中で若い人をどう取り込んでいくか、広い



武本嘉成「由布岳錦秋」（油彩・P20）

意味での山岳画、つまり中村清太郎氏が言った広義の形を打ち出して若い人に参加してもらい、これをやることによって会の安定化も図れるし、維持運営も可能になってくるのではと思います。だが問題は、本来は絵描きのプロ集団なんだけれども、今はなかなかそれが難しくなっている状況にあります。山に登る事と、絵を描く事と二人分を一遍にやろうという、そういう若い人たちが生活以外に、この厳しい中でできるかといったら、なかなか出来ないんですね。そのためには油絵もいいし、水彩もいいし、版画もいいし、山に関連する作品、例えば貼り絵でもいいし、いろんな意味で多才な形でメンバーを集めて取り組んでいきたいなと。これから75周年、80年、90年、100年とやっていかれるような今の土台作りをやっていきたいと斯様に思っています。

―それでは個人的には今後どのような思いで、どのような絵を描いていきたいかお話し頂ければとおもいます。

（田中）

山がいろいろ自分に働きかけてくれる、そこで生じた感情とか感動とか、そういうものが表せた絵が描けたらなと思います。自分に生じた感情が、絵を見て受け止める側が同じ感情を持つということは有り得ませんが、何か気持ちを動かされる、そうした絵を描きたいというのが今の気持 です。また、この会でいろんな方から刺激を受けて作品づくりをしています。一所に留まらず成長を続けたいと思います。

（千葉）

本来自分がイメージしているようなものが、もし出来てしまったらもうそれ以上描く必要は無くなります。ですからせいぜいそれには努力をしていくんだろうなとは思います。そのために自分のやってきたことをこれからも続けていこうということですが、そういうものを作っていくためには、自分は出きるかぎり定点で描いています。毎年毎年同じ時期に同じ場所でイーゼルを立てて描いていますので、あるいはイーゼルが立てられなかったら、同じ石や岩の上に腰を据えて描いています。

繰り返し描く事で見えてくるものが違ってくると思いますし、その中で一つのテーマが毎年少しづつでも進歩してくる、そんな状況がでてくればいいと思います。同時に、同じ時期つまり来年の同じ日、同じ時刻、同じ場所に行っても同じ姿は見えないでしょうし、仮に明日行っても今日とはまた違う自分がいるでしょうし。その中で繰り返し描くことで、階段に例えたら一段ずつ登って、自分の絵が進んでいくことを楽しみにしていきたいなという、これまでもそうですがこれからも同じスタンスで絵を描いていこうと思っています。

（須藤）

大自然に接して綺麗な音楽を聴いたりして感性を磨いて、その場の空気、風や匂いと、そういったものを感じさせるような感動的な絵が描ければいいなと思っています。

（中村）

信州に来て11年になるんですけれども、ここに来た時に村のおじさんが絵を見に来て、言われたんですよ。「いくら描いたって、実物の山にはかないっこない」（笑）なるほど、そやと思ったんや。その人はあくる日に奥さんと来られて、「昨日は失礼なことを申し上げました」。

そやけれどもその人は非常に正直な人で、本当のことを言ったと思うんですね。僕はたぶん一生かかっても、この山に勝てるはずはないですよ。ですからその時から心を入れかえて、初めから勝ち負けは気にしなかったけれども。この山と一緒に暮らしていくという、そのためにこの山に来たわけですから。別に勝負しに来たわけではないんで。（笑）そういうつもりで謙虚に山々に向かわなければならない。やっぱり山はすごいなと。たぶん乗越えることは出来ない。いつまでいっても悔いを残したまま死んでしまう。だけど真摯に向かっていく。それがこの麓に住んでいた人たちの山への想いと誇りに応える道だと思うし、山に対してもそうだし、自分自身の生き方としても素直に生きていきたいなという感じを持っています。

（若林）

私は山のある人里全体の雰囲気とか、そういう中で自分がいかにしてそれと同化して絵が描けるか、こちらの気持ちがね。正確に描いていなくても、心の安らぎというか、自分の心のリズムと自然の山を含めた風景のリズムとの合致されたもの、そんなものが描けたらいいなというのが最近の願いです。

（武井）

これからどのような絵を描くかということは、やはり私は原点であるきびしい岩稜、岩壁のある山ですね。見たものをその通り描かなくても写実のなかに心象的なものを加えて、何か自分の思いをそこに画いてみたいと思っています。年を重ねるにつれ、山に登れなくなっても、これまで長い間、頭の中に、体の中に仕入れたものを少しづつ出していく、そんなことを考えています。

北浦晃「十勝岳冠雪」（油彩・F50）

本日は、大変お世話になり、加えてまたこうした企画で取り上げて頂きまして、本当に山岳博物館にはお礼を申し上げます。今後ともぜひ宜しくお願いしたいと思います。それについては、先ほども申し上げたように、これまで長い時間をかけて築きあげたものをもっと良くし、もっと発展していくそういうような思いを、会員全員が共有してこれからも取り組んでいきたい。そして多くの方々に山岳画への関心を高めて頂けるよう努力をしてまいりたいと思っています。

―本日はお忙しい中長時間にわたりありがとうございました。今後とも日本山岳画協会の皆様のご活躍をご祈念致しますとともに、今後の大町山岳博物館での絵画展を期待し、楽しみにしておりますので、お体に気をつけて益々のご活躍をお祈りしております。

（文中に挿入致しました絵画は、このたび発刊致しました「日本山岳画協会　創立75周年記念画集」より転載致しました。）

武井清「小槍夕照」（油彩・F50）

山と博物館　第56巻　第8号
二〇一一年八月二十五日発行
発行　〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一―二二―〇二一一
FAX　〇二六一―二二―二二二二
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
印刷　㈱奥村印刷
定価　年額一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三二九三

R100　PRINTED WITH SOY INK　この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。